https://doi.org/10.18485/analiff.2025.37.1.8
811.521'367.625

動詞「打ち込む」の多義的な意味の現れ方

Sanja M. Joka*
Univerzitet u Beogradu, Filološki fakultet, Katedra za orijentalistiku
https://orcid.org/0009-0001-7932-837X

キーワード：
語彙的な意味、
文法的な意味、
カテゴリカルな意味、
多義性、
日本語、
複合動詞、
「打ち込む」、
意味分類

要旨

言語現象の分析においては、構造や意味関係を構成する要素の語彙的性質、文法的性質、そしてそれらの関係性を考慮する必要がある。また、単語の多義的性を考察する際、各語彙的な意味を個別に記述するのではなく、意味が現れる条件を実例に基づいて整理し、意味的タイプに分類することで、体系的な理解を深めることが可能である。本稿では、語彙的な意味、文法的な意味、そして両者をつなぐカテゴリカルな意味という概念を適用し、多義性が特に複雑な複合動詞「打ち込む」に焦点を当てた。その多義的な意味の現れ方を分析し、意味分類を試みた。分析は辞書記述および小説の用例に基づいて行った。分析の結果、「打ち込む」の多義的な意味は、大きく6つに分類できることが明らかとなった。これらは「叩いて内部に入れる」、「対象を相手の領域に移動させる」、「強く迫る、勢いよく押し寄せる」、「精神を集中する」、「球を打つ練習を十分にする」、および「敵陣に攻め込み、その勢力を二分する」といった意味である。特に、最初の3つの意味に関しては、さらに下位の意味的関係が確認された。これらの意味は、カテゴリカルな性質および文法的性質の変化に伴い、構造の変容を通じて新たな意味が現れる過程を示している。本稿は、語彙的な意な味、文法的な意味、カテゴリカルな意味という概念の適用、特定の構造における要素間の関係性を言語分析に含めることの重要性を示すものである。*(примљено: 18. септембра 2024; прихваћено: 8. априла 2025)*

CC BY SA

* Filološki fakultet
Katedra za orijentalistiku
Studentski trg 3
11000 Beograd, Srbija
sanja.joka@fil.bg.ac.rs

1. 研究の背景

言語学における語彙分析において、意味を捉える方法としては、形式意味論と認知意味論という二つの主要なアプローチがある（影山、1999:22）。形式意味論は、言語の意味を論理的に分析し、具体的な形式的記述や構造を通じて理解を目指している。このアプローチに基づく語彙分析では、「異なる意味」が「異なる形式」に対応するという多義性の処理方法が一般的であり、その処理方法については、さまざまな論理的枠組みが提案されている（杉本、1998:20-21）。

一方、認知意味論は、形式的な論理によって意味を捉えるのではなく、言語を実世界における人間の外界認識や日常的活動と密接に結びついたものとして捉え、言葉に従う含蓄なども意味の一部と見なされる（影山、1999:22）。さらに、認知意味論においては、メタファーおよびメトニミーが意味拡張の主要な要因とされ、これらは単なる修辞技法としてではなく、人間が知識を知覚し、整理し、構造化するための認知的枠組みとして位置づけられる（Johnson 、1987；影山、1999: 32)。

これら二つのアプローチに対し、連論は、単語の組み合わせがどのように結びつき、意味を形成するかを探求する。連語論は、「словосочетание」（語結合）の概念を中心に構築されており、特にロシア語学におけるヴィノグラードフの研究から大きな影響を受けている。ヴィノグラードフは、ロシア語における多様な語結合、すなわち慣用句および自由な組み合わせ[1]を分析し、単語の語彙的性質と文法的性質の関連性に注目した(宮島、2005:11-13)。日本語学においては、連語論が奥田（奥田、1962、1967、1968-1972、1984）によって初めて導入され、その後、早津（早津、2009、2015、2016など）や宮島（宮島、1996、2005など）による研究を通じて発展が続けられている。

連語とは、二つ以上(せいぜい四つ)の自立語の組み合わせと規定することができる。しかし、ヴィノグラードフはさまざまな単語の結びつきの中でも「従属的な結びつき」（例えば「皿を洗う」や「ご飯を食べる」など）のみを連語論の研究対象としている。[2]この結びつきは組み合わさる単語の語彙＝文法的な特性に依存しているが、文の中にしめている位置や機能に依存していない。[3]そのため、単語が文のそとに存在していると同じ意味で、連語も文のそとに存在しているとする。従って、連語は単語と同様に名づけの単位であって、文を組み立てる材料としてあらわれる。さらに、一つの結びつきは、別のいくつかの結びつきと対立しながら、補い合いながら、パラディグマチックな関係をとりむすんでいて、一つの体系をなしている（鈴木、1983: 4-11）。奥田の研究は、この方法論に基づき、日本語における名詞と動詞との組み合わせを分析し、日本語の格体系を詳細

---

1 単語が本来の意味を保持したまま組み合わされ、慣用句的な関係を示さない結びつきを指す。

2 二つの単語から構成される結びつきは、その性質に基づいて、大きく陳述的結びつき（predicative）、従属的結びつき（subordinative）、並列的結びつき（coordinative）の三種類に分類される。陳述的結びつきは、主語と述語の関係を形成するものである。一方、従属的結びつきは主語との直接的な関係を持たない特徴を有する。また、並列的結びつきは、「パンとバター」や「本とノート」のように、要素を入れ替えても全体の意味が変わらない組み合わせを指す。

3 例えば、「あの人は妻にやさしい。」や「あの人は妻にやさしい男だ。」における「妻にやさしい」という同一の連語は、それぞれの文において異なる機能をはたしているものの、連語内部の関係性が変化しない。

に記述している。また、動詞の多義的な意味の現れ方を、名詞や文中の他の要素との関係の中で体系的に捉えている。その際、結びつきの語彙的および文法的特徴を考慮し、特定の意味が現れる条件を設定した上で、それらをタイプに分類している。さらに、カテゴリー間の対立や相互関係を説明することで、連語の構造およびその体系的特性を示唆している。

このように、形式意味論、認知意味論、連語論のいずれも、意味の探求や言語の構造および使用に関する考察を行っている点では類似しているが、分析の焦点および方法論においては異なるアプローチを取っていることが明らかである。

連語論と形式意味論は、いずれも言語の形式に注目する点で類似しているが、連語論は単語の結びつきに、形式意味論は論理的構造に焦点を当てているという点で異なる。なお、連語論における「形式」とは、単に「異なる形」を指すのではなく、より広義の概念であり、早津が述べる「意味の内容を支える言語形式」を指している（早津、2009:2）。従って、たとえば「雨が降っ**ている**」（動作）に対する「窓が開い**ている**」（状態）や、「**大学を**燃やす」（建物）に対する「**大学を**設立する」（機関）のように、表面的に同じ形または単語の組み合わせが、広義の形の変化や構造の変化として捉えられる（早津、2015:1；宮島、1996:29）。つまり、語彙的およびカテゴリー的性質と密接に関連した形式の変化を問題としている。

また、連語論は、具体的な意味から抽象的な意味への拡張過程を探る点や、意味を文脈の中で考察する点では認知意味論と類似している。しかし、連語論は人間の認知過程や経験に注目せず、むしろ同じ現実が異なる構造的なタイプ（例えば、「部屋に人形をかざる」と「部屋で人形をかざる」など）によって表現される現象に着目する（鈴木、1983:10）。言語理解における心理的構造や「フレーム」を問題にしないため、これらの点ではフィルモアのフレーム意味論とも異なると言える。

奥田の研究は、日本語におけるさまざまな現象を体系的に分析し、重要な洞察を提供している。一方で、その方法論に関する詳細な説明は十分に示されておらず、具体的な現象の分析を通じて間接的に理解する側面が大きい。また、奥田は理論的研究において「カテゴリカルな意味」という概念を定義しているが、個別の言語現象の分析において積極的に活用しているわけではない。これに対し、早津は奥田の理論を受容し、それを基盤に、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、文法的な意味という概念を日本語の多様な特徴の分析や日本語教育において積極的かつ簡潔に導入している。早津の研究の重要な貢献の一つは、カテゴリカルな意味という概念を多くの言語現象において明確かつ分かりやすく活用し、それを単語の語彙的性質と文法的性質をつなぐ媒介として位置づけている点である（早津、2009、2015、2016など）。本稿においては、これらの概念が動詞の多義的な意味の解釈に有意義な手がかりを提供するとし、奥田の連語論を認めつつ、主に早津の方法論を参考にして考察を進める。特に、特定の構造を構成する要素の語彙的および文法的性質の関連性の解釈、意味が現れる条件の設定、意味分類およびカテゴリー間の関係の記述に関する参考部分が大きく、これらを考察に取り入れる。ただし、連語論における「従属的な結びつき」のみを対象にするわけではなく、むしろ構成要素をより広い文脈の中で捉え、その語彙的・カテゴリー的・文法的性質の変化や他の要素との共起を通じて意味拡張を考察している。言

語現象の分析における語彙的な意味、文法的な意味、およびそれらをつなぐカテゴリカルな意味の具体的な適用に関しては、例をもとに第4節において述べる。

2. 研究の目的

本稿では、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、および文法的な意味の観点から、動詞「打ち込む」の多義的な意味を分析することを目的とする。これにあたって、実例に基づき、各意味が現れる条件を整理し、タイプに分けることで意味を分類し、体系的にまとめることを目指す。分析においては、基本的な意味を出発点とし、そこから派生する意味およびその関係について考察を行う。

複合動詞は二つの動詞から構成され、前に位置する動詞を前項動詞、後ろに位置する動詞を後項動詞と呼ぶ。複合動詞の種類は非常に多様であるが、その中でも「込む」を後項動詞とするもの[4]は、文法的および語彙的に興味深い動詞である。現代日本語において「込む」は単独の動詞として用いられることは限られているが、後項動詞としては多様な複合動詞を形成する。また、「V1込む」の多くの動詞は、多義性が複雑であり、さまざまな意味構造を生み出している。このような特徴を考慮し、「V1込む」の多義的な意味の現れ方に焦点を当て、その一例として動詞「打ち込む」を研究対象とする。

「V1込む」に関する先行研究においては、多くの場合、前項動詞と「込む」との関係に基づき、その多様な意味が説明されている（姫野、1999、2001；松田、2001a、2001b；松本、2009）。しかし、複合動詞においては、構成要素の元の意味が変容する場合があり[5]、「V1込む」の意味は、前項動詞と後項動詞の関係よりも、むしろ一つの意味単位として捉えるべき組み合わせが多く見られる。[6]

これらの点を踏まえ、動詞「打ち込む」を一つの意味単位として捉え、その多義的な意味の現れ方を言語形式との関係において明らかにする。

3. 分析対象

「新潮文庫の100冊」という電子書籍を対象に、その中から実例を収集した。「新潮文庫の100冊」は、CD-ROMを使用してパソコンのディスプレイ上で閲覧する形式の電子書籍である。分析の対象としたのは、20世紀に発表された小説61冊であった。動詞の意味を記述する際には、辞書に記載された実例も参考にした。

収集した「V1込む」の実例は合計975例（異なり語数125語）である。そのうち、単義的な動詞の異なり語数は51語、多義的な動詞は74語である。分析対象とした動詞には、「打ち込む」、「売り込む」、「送り込む」、「落ち込む」、「思い込む」、「抱え込む」、「突っ込む」、「包み込む」、「詰め込む」、「飲み込む」が含まれているが、ここでは特に多義的な現れ方が複雑で興味深い「打ち込む」に焦点を絞る。

4. 分析の前提

動詞「打ち込む」の多義的な意味を具体的に考察するに先立ち、まず語彙的な意味、文法的な意味、およびカテゴリカルな意味について概説する。

---

4 以下「V1 込む」
5 例えば、「人をお金で抱き込む」などにおいて
6 「申し込む」、「見込む」、「食い込む」など

単語には語彙的な意味と文法的な意味が存在する。語彙的な意味とは、その単語が示す物事に共通する一般的な内容を指す。この二つの意味について、早津（早津、2009、2015）は次のように述べている。

> ふつう国語辞典に書かれているのは語彙的な意味である。それに対して、文法的な意味とは一定の文法的な形を整えた単語が他の単語との関係の中で発揮する（物事と物事との関係的な意味、およびそれらと話し手との陳述的な意味）である。（早津、2009:4、2015:6）

具体的な例として、「走る」は/足をすばやく動かして移動する/という語彙的な意味を持つ。それに対し、「走る」は、形を整えて以下のような文法的な意味が現れる。[7]

走った	走らない	走っている	走れば	走っても（間に合わない）
［過去］	［否定］	［動作の継続］	［条件］	［逆条件］

また、「小屋」の語彙的な意味は/小さく、簡単な造りの粗末な建物/または/仮に建てた小さな建物/とされる。この名詞は格助詞と組み合わさり、多様な文法的な意味を表わす。

小屋を掃除する	**小屋を**作る	**小屋を**出る	**小屋を**通る
［動作の対象］	［生産の対象］	［出発点］	［通過点］

これらの例においては、同じ「小屋を」という形式が[動作の対象]、[生産の対象]、[出発点]、[通過点]といった異なる文法的な意味を示している。

単語の語彙的な意味および文法的な意味は、単独で存在するわけではなく、何らかの関係で結びついている。その関係はカテゴリカルな意味によって表わされる。カテゴリカルな意味とは、単語の語彙的な意味の中で、文法的な性質と関連して共通的に取り出せる側面を指す。奥田（奥田、1984）はカテゴリカルな意味について次のように述べている。

> 要素=単語の語彙的な意味と文法的な意味の間には、媒介としてカテゴリカルな意味categorical meaningがある。カテゴリカルな意味というのは、文法的な結びつきとのかかわりとのなかにおける、語彙的な意味の一般化である。（奥田、1984:162）

つまり、カテゴリカルな意味とは、語彙的な意味と文法的な意味を繋ぐものである。単語は一定の規則に従い、他の単語と組み合わさることで文法的な結びつきを形成する。しかし、この規則は単語ごとに適用されるのではなく、特定の単語のグループにおいて共通して働くわけである。そのため、特定の単語のグループに共通して取り出せる側面が、カテゴリカルな意味である（早津、2015: 3-4）と言える。例えば、

7　以下、語彙的な意味を//で示し、文法的な意味を[]で示す。

a **野原**で散歩する　**砂浜で**読書する　**映画館で**映画を見る　**学校で**働く　**森**で走る
b **病気**で寝込む　**ペンで**書く　**笑顔で**迎える　**雨で**服が濡れる　**はさみで**紙を切る

a において、デ格で示される名詞の文法的な意味は、[動作や出来事の場所]になる。それに対して、bにおけるデ格名詞は同じ文法的な意味を表わすとは言えない。aとbの名詞を比較すると、aの名詞はすべて空間性を持つ名詞であることがわかる。つまり、デ格が空間性を持つ名詞と組み合わさる場合には、[動作や出来事の場所]　という文法的な意味を表わすと考えられる。従って、aの名詞においては〈空間〉という、カテゴリカルな意味を取り出すことができる。[8]〈空間〉というカテゴリカルな意味はaの名詞の語彙的な意味の中で[動作や出来事の場所]　という文法的な意味と関連し、共通して取り出せる側面である。また、次に挙げるデ格名詞の文法的な意味は[手段]になる。

c **ペンで**書く　**石で**窓を割る　**鍵でドア**を開ける　**バケツで**水を汲む　**布で**拭く

これらを「雨で服が濡れる」や「野原で散歩する」といった例と比較すると、〈物〉という共通の側面が取り出せることがわかる。つまり、デ格が〈物〉というカテゴリカルな意味を表わす名詞と組み合わさる場合には、[手段]という文法的な意味が示される。また、

d **雨で**服が濡れる　**地震で**橋が崩れる　**火事で**家が燃える　**熱中症で**倒れる

におけるデ格名詞の文法的な意味は[原因]であり、これらの名詞に共通して取り出せる側面は〈現象〉である。従って、デ格が〈現象〉というカテゴリカルな意味を表わす名詞との組み合わさる場合には、[原因]という文法的な意味が示されると考えられる。

次に、「V1込む」を例に取り、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、および文法的な意味の観点から、「V1込む」の多義的な意味の現れ方を示し、その有効性を検証する。

a **唾液を**飲み込む（蛇が）**動物を**飲み込む（魚が）釣り糸にかかった**餌を**飲み込む
b **説明を**飲み込む　**理由を**飲み込む　**難しい内容を**飲み込む　**新ルールを**飲み込む
c **怒りを**飲み込む　**不満を**飲み込んで（仕事を続ける）　**悲しみを**飲み込む

(a) における「飲み込む」の語彙的な意味は/口に含んで喉を通して体内に取り入れる/になり、これは「飲み込む」の基本的な意味になる。(b) は/情報や知識を理解し、受け入れる/になり、(c)は/感情を抑える/になる。これらは「飲み込む」の派生的な意味になる。これらの意味における組み合わさる要素のカテゴリカルな意味および文法的な意味を基に多義的な意味の現れ方をまとめる。

(a) におけるヲ格名詞として/唾液/、/動物/、/餌/が現れるが、これらはすべて具体物を指しているため、そのカテゴリカルな意味を〈物〉としてまとめることができる。その文法的な意味は[対象]になる。この意味において「飲み込

8　以下、カテゴリカルな意味を〈〉で示す

む」は物理的な動作を示している。従って、この現れ方を以下のようにまとめることができる。

(a)
[対象]ヲ　　V物理的動作　　/口に含んで喉を通して体内に取り入れる/
〈物〉

それに対して、（b）におけるヲ格名詞/説明/、/理由/、/難しい内容/、/新しいルール/などは、人が受け入れようとして把握する抽象的な内容を示しているため、これらのカテゴリカルな意味を〈内容〉としてまとめることができる。この場合、文法的な意味は［思考の対象］となる。組み合わさる要素の意味が抽象化することにより、「飲み込む」の意味も抽象化し、知的作用を表す。従って、この現れ方は以下のようにまとめることができる。

(b)
[思考の対象] ヲ　　V知的作用　　/情報や知識を理解し、受け入れる/
〈内容〉

また、（c）においても意味の抽象化が見られるが、ヲ格名詞は（b）に比べて異なる性質を持ち、〈感情〉としてまとめることができる。この場合、文法的な意味は［内的体験[9]の対象］となる。つまり、「飲み込む」は感情を表す抽象名詞と組み合わさる際、心理活動を示すと考えられる。この現れ方は以下のようにまとめることができる。

(c)
[内的体験の対象] ヲ　　V心理活動　　/感情を抑える/
〈感情〉

次に、動詞「送り込む」の多義的な意味の現れ方について検討する。「送り込む」には以下のような意味が見られる。

a **工場に部品を**送り込む　**研究所に新しい装置**を送り込む
b **会社に専門家を**送り込む **新しい支店に社員を**送り込む **台湾に人材を**送り込む
d **政治の世界に新しい風を**送り込む　**ビジネスの現場に新しい技術を**送り込む

これらの例が示す意味はaが/届ける、供給する/、bが/派遣する/、ｃが/特定の分野・領域に新しいアイデアや活力を導入する/という意味になる。これらの意味の多義性を整すると、組み合わさる要素の性質の変化に伴い、構造の変化が認められることがわかる。a)においてヲ格名詞のカテゴリカルな意味は〈物〉で

9　奥田は「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田、1968-1972）において、このような組み合わせを「内容規定的なむすびつき」の一部である「体験の内容規定」と名付けている。これに類似する例として、「怒りを感じる」、「悲しみを味わう」、「反感を覚える」などが挙げられる。このため、これらの意味におけるヲ格名詞の文法的な意味は［内的体験の対象］としてまとめられる。

あり、その文法的な意味は［対象］である。ニ格名詞はカテゴリカルな意味は〈空間〉であり、その文法的な意味は［到着点］である。この場合、「送り込む」は物理的な動作を表しており、構造全体を物の「移動」として捉えることができる。それに対し、b）におけるニ格名詞は〈組織・空間〉になり、文法的な意味は［到着点・目的地］となる。ヲ格名詞はカテゴリカルな意味は〈人〉であり、その文法的な意味は［対象］となる。この場合も、「送り込む」は物理的な動作を示しているが、その構造全体が物ではなく、人の「移動」を表していることがわかる。[10]また、c）においては組み合わさる要素の性質が抽象化することにより、動詞の意味も抽象化している。この場合、ニ格名詞のカテゴリカルな意味は〈領域・状況〉であり、文法的な意味は［出現のところ］を示す。ヲ格名詞のカテゴリカルナ意味は〈内容・状態〉であり、その文法的な意味は［出現の対象］を示す。このため、「送り込む」は「状態の出現」を表す構造を形成していると言える。従って、「送り込む」のこれらの多義的な意味を以下ように整理し、まとめることができる。

a **［到着点］ニ　［対象］ヲ　　V動作・物の移動**　　/届ける、供給する/
〈空間〉　　〈物〉
b **［到着点・目的地］ニ　［対象］ヲ　V動作・人の移動**　　/派遣する/
〈組織・空間〉　　〈人〉
d **［出現のところ］ニ［出現の対象］ヲ V状態の出現**　/新しいアイデアを導入する/
〈領域・状況〉　〈内容・状態〉

このように、特定の構造において組み合わさる要素の語彙的および文法的性質に基づき、多義的な意味の発展や現れ方を探ることができる。また、これにより、特定の意味が現れる条件を整理することが可能であることが明らかとなる。

次の節では、「打ち込む」の多義的な意味の現れ方をこれ考察し、意味が現れる条件を整理していく。

5.「打ち込む」の多義的な意味の現れ方

辞書の記述および用例の分析を基に、「打ち込む」の多義的な意味の現れ方は、六つに大きく分けることができる、と考えられる。

1　//叩いて内部に入れる//[11]
2　//対象を相手の領域へ移動させる//
3　//強く迫る、勢いよく押し寄せる//
4　/精神を集中する/
5　/球を打つ練習を十分にする/
6　慣用句的な表現としての現れ方

10 奥田も「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田、1968-1972）において、「物の移動」と「人の移動」を別の意味的カテゴリーとして設定しているが、これらを「物に対するはたらきかけ」の一部である「うつしかえ」と、「人に対するはたらきかけ」の一部である「空間的な位置変化」として分類している。
11 1、2、3のそれぞれにおいて、下位語彙的意味が現れるため、これらを// //で示している。

その中で、//叩いて内部に入れる//、//対象を相手の領域へ移動させる/ /および、//強く迫る、勢いよく押し寄せる//を更に詳細に分けることができ、「打ち込む」の多義語の語彙的な意味を以下の表の通りまとめることができる、と考える。

1	//叩いて内部に入れる//	1.1	/物を固体の中に叩いて入れる/
		1.2	/相手を強く打つ/
		1.3	/打鍵する/
2	//対象を相手の領域へ移動させる/ /	2.1	/野球、テニス、卓球などの球技で相手の陣地に球を打って入れる/
		2.2	/弾球などを発射して敵に当てる/
3	//強く迫る、勢いよく押し寄せる//	3.1	/相手に打ちかかる/、/争う/
		3.2	/表面に向かって打つ/
4	/精神を集中する/		
5	/球を打つ練習を十分にする/		
6	慣用句的な表現としての現れ方		

表1　「打ち込む」の多義的な意味

/叩いて内部に入れる/の中の/物を固体の中に叩いている/という語彙的な意味が、「打ち込む」の基本的な意味となり、それに基づき他の語彙的な意味を「打ち込む」の派生的な意味として捉えることができる。

1および2にける「打ち込む」の下位分類における語彙的な意味との違いは、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味の異なる性質に起因すると考えられる。それに対し、3、4および5においては、要素のカテゴリカルな意味の性質に加え、より広範な構造変化も見られる。さらに、6で提示された語彙的な意味は特定の名詞との組み合わせにおいてのみ現れる。

次に、これらの事例を考察し、新たな意味が拡張されていく過程について整理・分析する。

5.1. //叩いて内部に入れる//

//叩いて内部に入れる//に含まれる「打ち込む」には３つの語彙的な意味の現れ方があり、それぞれがガ格名詞、ニ格名詞、ヲ格名詞との組み合わせで現れる。これらの語彙的な意味に共通する特徴は、ニ格名詞のカテゴリカルな意味が〈物・表面〉としてまとめられることである。要素の文法的な意味はニ格名詞が［付着箇所］、ヲ格名詞が［対象］に対応し、構造全体として「付着」[12]という意味的関係を示す。また、これらの語彙的意味にはいずれも/叩いて内部に入れる/という意味的側面が保持されている。

12 早津が定義する「付着」という意味的関係は、奥田が提示する「とりつけ」に適応する。

5.1.1. 基本的な意味

//叩いて内部に入れる//における一つ目の語彙的な意味は、「打ち込む」の基本的な意味になると考える。それは、/物を固体の中に叩いて入れる/という意味である。この意味において、カテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈物・表面〉、ヲ格名詞が〈物〉になる。それぞれは、[主体]、[付着箇所]、[対象]という文法的な意味を表わしている。

基本的な意味におけるヲ格名詞の語彙的な意味には、代表的な例として「杭」「釘」「生木」などが挙げられる。これらはすべて〈物〉としてまとめられるが、共通する特徴として、細長い形状を持つ具体物である点が挙げられる。以下に、基本的な意味における実例を示す。

(1) 島の他の三方は石垣を組んであるが、その南端は海の波をじかにかぶるので、三年に一度くらいは暴風雨のために崩されるという。こんどはそんなことのないようにと、**水際**を十尺以上も掘り、**杉丸太の杭を**深く**打ち込んで**、地　固めから頑丈に工事を進めた。（さぶ）

(2) わたしは金槌と釘をもらって、三畳の方に間にあわせのコート掛けをつく　ろうとしました。そして、手ごろな場所を探しているうちに、**窓と入口とのあ いだの壁に**、すでに**釘が一本打ちこまれている**のを発見しました。（團欒）

(3) 丸根砦というのは、ここらあたりの古寺を改造したもので、塀には舟底板のようなものを打ちつけ、柵には生木を底浅く打ちこみ、砦のまわりにたった二間幅の堀を、それも一重にめぐらしただけのもので、富強な今川軍からみれば、…（国盗り物語）

例（1）におては、［付着箇所］という要素が明示されていないが、文脈から/南端の海岸に/、/水際/、/地面に/などのような要素が暗示できる。

5.1.2. /強く打つ/

「打ち込む」の派生的な意味第一として、/強く打つ/という語彙的な意味が存在する。この意味において、組み合わさる要素のカテゴリカルま意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈物・表面〉、ヲ格名詞が〈動作〉になる。それぞれは、[主体]、[付着箇所]、［対象]という文法的な意味を表わしている。この意味においても、動詞「打ち込む」は動作を表している動詞である。以下にその実例を示す。

(4) 羽草が倒れ込むようにして接近してきた瞬間、**内藤は左で羽草の脇腹に鮮やかなフックを打ち込んだ**。（一瞬の夏）

この意味において、ヲ格名詞の語彙的な意味に、「打つ」行為を表わす名詞が現れるため、そのカテゴリカルな意味を〈動作〉としてまとめることができる。この点で「打ち込む」の基本的な意味とは異なるが、両者ともに具体的な動作を示している。ニ格名詞の語彙的な意味は、相手の身体部位や相手自身を表わすが、この文脈では「人間」としての積極性が欠如しているため、この要素を物として扱うことが可能であり、そのカテゴリカルな意味を〈物・表面〉とすることができる。〈人〉の〈動作〉がその中に一時的に留まるという側面を含むため、構造全体は「付着」という意味的関係を表していると考えられる。

5.1.3. /打鍵する/

「打ち込む」の派生的な意味第二として、/打鍵する/という語彙的な意味がある。この意味において、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈物・表面〉、ヲ格名詞が〈内容〉になる。それぞれは、[主体]、[付着箇所]、 [内容の対象]という文法的な意味を表わしている。この場合も「打ち込む」は動作を表す動詞である。以下にその実例を示す。

(5) 彼女は（省略）**コンピューターのキイボードに『ほにゅうるい』という単語をうちこんだ。**（世界の終わり）

ニ格名詞の語彙的な意味として、/コンピューターのキーボード/や/コンピューター/などが考えられ、これらはいずれも通信機械の一部を表わす名詞である。しかし、/打鍵する/という意味においては、「機械の表面に接触し、そこに内容を入力する」という、意味的な側面が含まれるため、この要ぞのカテゴリカルな意味を〈もの・表面〉として、構造全体を「付着」を表す意味関係としてまとめることができると考えられる。

5.2.//対象を相手の領域へ移動させる//

//対象を相手の領域へ移動させる//における「打ち込む」は、ガ格名詞、ニ格名詞、ヲ格名詞と組み合わさる。この意味における「打ち込む」の共通点は、ニ格名詞が「相手/先方の領域」を表し、ヲ格名詞が物を指すことである。従って、ニ格名詞のカテゴリカルな意味を〈空間〉として、ヲ格名詞を〈物〉としてまとめることができる。また、この意味における「打ち込む」が「自分の領域とは異なる領域へ対象を移動させる」という意味的側面を含むことも特徴的である。このグループに属する「打ち込む」には、二つの語彙的な意味が挙げられる。

5.2.1./野球、テニス、卓球などの球技で相手の陣地に球を打って入れる/

「打ち込む」の派生的な意味第三として、/野球、テニス、卓球などの球技で相手の陣地に球を打って入れる/という語彙的な意味がある。この意味になる場合、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈空間〉、ヲ格名詞が〈物〉になる。それぞれは、[主体]、[到着点]、[対象]という文法的な意味を表わしている。この意味においても「打ち込む」は動作を表す動詞であるが、（5.1.）と違って、「付着」でなく、「移動」という意味的関係を表している。

この意味の現れ方は、スポーツ分野の文脈に限られており、ヲ格名詞の語彙的な意味が球類を表わすもの[13]になる。従って、そのカテゴリカルな意味を〈物〉としてまとめることができる。この意味の実例を以下に挙げる。

(6) **ライトスタンドに（ボールを）**打ち込む（『大辞泉』）

(7) 誰だってあわてて転ぶことくらいはあるにしても、野球の試合中に二三塁間で転ぶべきではないのだ。それでがっくりしたせいか、ピッチャーは相手の**トップバッターに**つまらない**ストレート・ボールを投げて、レフト・スタンドにホームランを打ちこまれ**、四対一になった。（世界の終わり）

13 その類義語を含め

5.2.2./弾丸などを発射して敵に当てる/

「打ち込む」の派生的な意味第四として、/弾丸などを発射して敵に当てる/という語彙的な意味がある。この意味になる場合、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈空間〉、ヲ格名詞が〈物〉になる。それぞれ、[主体]、[到着点]、[対象]という文法的な意味を表わしており、構造全体が「移動」を表している。この意味での実例を以下に挙げる。

(8) 発射の衝撃で艦の振動が非常にはげしかったといわれ、後にフューリアスからはずした四六センチ砲をイギリスのモニターという砲艦に備え附け、第一　次大戦中ベルギーのフランダース沖から**ドイツ軍に砲弾を打ち込んだ**ともいわれているが（省略）（戦艦武蔵）

(9) （省略）という特殊な足軽部隊を繰り出した。人数三百人ほどの礫を打つことに長じた足軽で、全軍のまっさきに進んで**無数の礫を打ちこみ**、敵に面をあげる余裕をなからしめるための部隊であった。（国盗り物語）

この意味において、ヲ格名詞の語彙的な意味としては/砲弾/、/礫/などが代表的な例であり、円形の物を表わす点で/球技で相手の陣などに球を打って入れる/という意味におけるヲ格名詞と類似している。しかし、(5.2.1.)ではヲ格名詞の想定種類がより限られておいる。また、両者においてニ格名詞が相手の領域を表す点でも共通しているが、(5.2.1.)がスポーツ分野の文脈に現れるのに対し、(5.2.2.)は戦闘や競争相手との対立を描写する文脈で使用されるという違いがある。

5.3.//強く迫る、勢いよく押し寄せる//

//強く迫る、勢いよく押し寄せる//に含まれる「打ち込む」は、ガ格名詞およびニ格名詞とだけ組み合わさる。これらの語彙的な意味の共通点として、「打ち込む」の自動詞としての現れ方であることが挙げられる。従って、これらはヲ格名詞を取らず、[対象]という文法的な意味を表わさない。このことから、このグループに含まれる「打ち込む」は、自動性が含まれており、それが構造全体の文法的な性質にも影響を与えている。このグループに属する「打ち込む」には、二つの語彙的な意味が挙げられる。

5.3.1./相手に打ちかかる/、/争う/

「打ち込む」の派生的な意味第五として、/相手に打ちかかる/、/争う/という語彙的な意味がある。この意味において、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈物・表面〉[14]となる。それぞれ、[主体]および[付着箇所]という文法的な意味を表わしている。この場合、「打ち込む」は動作を表す。以下にその実例を挙げる。

(10) **ナオミは**私と決戦すると、始めから気を呑んでかかり、素晴らしい勢で**打ち込んで来るので**、**此方は**ジリジリと圧し倒されるようになり、立ち怯れがしてしまうのです。（痴人の愛）

14 (5.1.2.)におけるニ格名詞と同様に、語彙的な意味が/人/であるものについても、主体としての積極性が欠如しているため〈物〉として捉える。

5.3.2. /表面に向かって打つ/

「打ち込む」の派生的な意味第六として、/表面に向かって打つ/という語彙的な意味がある。この意味において、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈現象〉、ニ格名詞が〈物・表面〉になる。それぞれ、[主体]および[付着箇所]という文法的な意味を表している。この意味において「打ち込む」は動作を表す動詞であり「付着」という意味的関係を示しているが、例（11）のように、移動性が含まれる場合もある。以下にその実例を示す。

（11）「初めて口をきいたのが夜だったからかもしれねえ、やっぱり南の海っぱたで、月夜だったっけ、まだ護岸工事をするまえだから、石垣の崩れたところから**波が打込んで、砂の窪みが**幾つもできていた…」。（さぶ）

（12）二人の漁夫は大竿を風上になった**舷**から二本突き出して、動かないように結びつける。船の顛覆を少しなりとも防ごう為めだ。君の兄上は帆綱を握って、舵座にいる父上の合図通りに帆の上げ下げを誤るまいと一心になっている。そしてその間にもしっきりなしに**打ち込む浸水**を急がしく汲んでは**舷から**捨てている。（生れ出づる悩み）

動詞「打ち込む」の組み合わせにおいて、[主体]を表す要素のカテゴリカルな意味がほぼ〈人〉になるため、/到着点に向かって打つ/における[主体]のカテゴリカルな意味を擬人化のようにとらえることもできると言える。

5.4. /精神を集中する/

「打ち込む」の派生的な意味第七として、/精神を集中する/という語彙的な意味がある。この意味において、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ニ格名詞が〈動作〉になる。それぞれ、[主体]および[対象]という文法的な意味を表わしている。この意味では、「打ち込む」はヲ格と組み合わさらないため、形式上「打ち込む」の自動詞としての現れ方と見なされる。しかし、行為の[対象]はニ格名詞で表されるため、この構造における多動性がある程度認められると考えられる。以下にその実例を示す。

（13）若い頃の**頼央は**（省略）そんな生活も、二十九歳の時、村内の文具店の娘珠子と結婚してからは改まり、**画業に打ちこみはじめる**。（エディプスの恋人）

（14）仕事は案の定退屈なものだった。（省略）それでも**僕は**何とかそこに興味を見いだせないものかと、半年ばかり熱心に**仕事に打ち込んでみた**。（国境の南、太陽の西）

（15）「まあ聞けよ」栄二は酒を啜り、考えをまとめるように、ちょっと口をつぐんだ、「—**おれは**この腕のなまりを、取り戻すことにかかりきりだった、さぶの受けて来る雑な仕事もしたが、そのほかは**自分の手直しだけにうちこんでいた**」（さぶ）

これらの例における「打ち込む」は、(5.1.)～(5.3.)で述べた意味とは異なり、物理的な動作ではなく、特定の活動や目的に対する集中や献身を表している。ニ格名詞が具体物の物理性や空間性を持つ要素[15]ではなく、動作性を持つ要

15 カテゴリカルな意味が〈空間〉や〈物・表面〉などになり、そこに動作が向けられる、または付着されるという意味を示す要素

素[16]になり、その結果として、その文法的な意味が行為の[対象]を表すようになる点が、「打ち込む」の構造上の意味変化や展開の要因として考えられる。この場合、「打ち込む」は目的達成に向けた動作を表わすようになる。

5.5./球を打つ練習を十分にする/

「打ち込む」の派生的な意味第八として、/球を打つ練習を十分にする/という語彙的な意味がある。この場合、組み合わさる要素のカテゴリカルな意味は、ガ格名詞が〈人〉、ヲ格名詞が〈物〉となる。それぞれ、[主体]および[対象]という文法的な意味を表わしている。この意味において、「打ち込む」はニ格名詞と組み合わさらないが、ヲ格名詞と組み合わさるため、単に一時的に動作をどこかへに向けるのではなく、反復的な動作を表すことが特徴である。

/球を打つ練習を十分にする/という意味も（5.2.1.）と同様、スポーツ分野での文脈に限定されており、ヲ格名詞の語彙的な意味は球を表すものになる。このことを、派生的な意味おける組み合わさる要素の範囲が限定される例として捉えることができる。次に挙げる実例では、ヲ格名詞が明示されていないが、文脈からそれが〈物〉の中でも/ボール/などを指すことが想定できる。

（16）**納得が行くまで打ち込む**（『大辞泉』）

（17）バッティングマシーンで**打ち込む**（『大辞林』）

この場合、目的を達成しようとしたり技術を向上させようとしたりする行動を、時間をかけて何度も繰り返す動作を表すようになる。そのため、強い程度や長い時間を示す副詞や句などと組み合わさることが想定される（例えば、「何時間もボールを打ち込む」、「何度も球を打ち込む」など）。

5.6.慣用句的な表現としての現れ方

「打ち込む」は、特定の名詞/楔/と組み合わさる際、慣用句的な表現としての現れ方がある。この場合、/敵陣の中に攻め込んで、その勢力を二分する/、/親しい間柄に邪魔を入れる/という語彙的な意味となる。

「打ち込む」はこの意味において、「楔」という単語以外のヲ格名詞を取らない。この場合「楔を打ち込む」という組み合わせは形式上二つの単語で構成されているが、それを同じ意味を保ちながら自由に二つの意味要素に分けることはできず、全体として一つの新しい意味を形成している。また、(5.1.)～(5.5)で述べた他の意味とは異なる独立の意味を持つ。従って、「打ち込む」のこの現れ方は、慣用句的な表現として捉えることができる。

この場合、を格名詞で示させる要素を/楔/ではなく、/望ましくない状態、悪影響/として解釈することができ、そのカテゴリカルな意味を〈状態〉としてまとめられる。その文法的な意味は[対象]になる。ニ格名詞は、カテゴリカルな意味が〈状況〉、〈精神的領域〉または〈空間〉になり、その文法的な意味は［出現のところ］となる。ガ格名詞のカテゴリカルな意味が〈人〉または〈状況〉になり、そのカテゴリカルな意味が［状態の原因］になると言える。「打ち込む」の慣用句的な表現は(5.1.）～（5.5.）のように動作ではなく、状態の「出現」を表している。[17]

16 /仕事/、/画業/などは動作性を持つ名詞なので、そのカテゴリカルな意味を〈動作〉としてまとめられる。

17 奥田も「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（奥田、1968-1972）において、「出現のむすびつき」という意味的関係を設定している。

(18) 現在、全共闘運動は曲り角にきていると言われる。東大、日大など権力との鮮烈な闘争を始めとする全国の学園における**闘いは、現在のブルジョア秩序に鋭いくさびを打ちこんだ**。…（二十歳の原点）

(19) 肉体を取るというはなはだ形式的な実証をもって**地上にゆるぎのない信仰の楔を打ちこんだ**のは、はるかに遠く、**クリストの復活であった**。死んでから三日たって墓場に行ってうかがうと、地上の俗眼にもよく見えるようなぐあいに、あやまたず、あたらしい肉体を取ってみせたのは、神の子かダヴィデの裔か知らないが、ナザレのイエスの智慧才覚あっぱれであった。（淳かよい小町）

(20) そしてまた一**本の楔、悪い病気の疑いが彼に打ち込まれた**。以前見た夢の一部が本当になったのである。（ある心の風景）

「打ち込む」はこの意味において/楔/以外の単語とは組み合わさらないため、これを組み合わさる要素の特殊化として捉えることができる。つまり、「打ち込む」は特殊の名詞と組み合わさる場合にのみ、慣用的な意味を持つようになるのである。

「楔を打ち込む」という表現は、慣用句的な表現だけでなく、文字通りの意味でも用いられることがある。つまり、この表現は慣用句であると同時に、基本的な意味（5.1.1.）としても現れる。この場合、組み合わせの意味要素を二つに分けることができる。基本的な意味において、ヲ格名詞のカテゴリカルな意味は〈物〉、ニ格名詞のカテゴリカルな意味は〈物・表面〉となり、構造全体として「付着」の動作を表している。どちらの意味になるかは文脈、すなわち組み合わせと文の他の要素との関係によって判断される。以下の実例は「打ち込む」の基本的な意味を示している。

(21) 私もどちらかといえば丈夫な方だが、中腰で歩いていると下腹の傷がずきずきと痛んだ。まるで**氷の楔を腹に打ちこまれている**ような痛みだった。（世界の終わり）

6.結論

以上で述べたことから、語彙的な意味、カテゴリカルな意味、文法的な意味の観点に基づき、「打ち込む」の多義的な意味の現れ方を以下のようにまとめることができる。

1.　/叩いて中部に入れる/				
Ⅰ［主体］ガ	［付着箇所］ニ	［対象］ヲ	/物を固体の中に叩いて入れる/	
〈人〉	〈物・表面〉	〈物〉	動作・付着	
Ⅱ［主体］ガ	［付着箇所］ニ	［対象］ヲ	/強く打つ/	
〈人〉	〈物・表面〉	〈動作〉	動作・付着	
Ⅲ［主体］ガ	［付着箇所］ニ	［内容の対象］ヲ	/入力する/	
〈人〉	〈物・表面〉	〈内容〉	動作・付着	
2.　/対象を相手の領域へ移動させる/				
Ⅳ［主体］ガ	［到着点］ニ	［対象］ヲ	/野球で相手の陣地に球を打って入れる/	
〈人〉	〈空間〉	〈物〉	動作・移動	

V［主体］ガ	［到着点］ニ	［対象］ヲ	/弾球などを発射して敵に当てる/	
〈人〉	〈空間〉	〈物〉	動作・移動	
3．/強く迫る、勢いよく押し寄せる/				
VI［主体］ガ	［付着箇所］ニ		/相手に打ちかかる/、/争う/	
〈人〉	〈物・表面〉		動作・付着	
VII［主体］ガ	［付着箇所］ニ		/表面に向かって打つ/	
〈現象〉	〈物・表面〉		動作・付着・移動性	
4．/精神を集中する/				
VIII［主体］ガ	［対象］ニ		/精神を集中する/	
〈人〉	〈動作〉		動作・目的性	
5. /球を打つ練習を十分にする/				
IX［主体］ガ	［対象］ヲ		/球を打つ練習を十分にする/	
〈人〉	〈物〉		動作・反復	
6．慣用句的な表現としての現れかた				
X［状態の原因］ガ	［出現のところ］ニ	［対象］ヲ	/敵陣の中に攻め込んで、二分する/	
〈人、状況〉	〈状況、精神的領域、空間〉	〈状態〉	状態の出現	

表2「打ち込む」の多義的な意味のまとめ

次に、「打ち込む」の多義性に関して整理する。

「打ち込む」は多義的な意味の現れ方が複雑な動詞であり、その意味を大きく六つのグループに分類できると考えられる。これらのグループは//叩いて内部に入れる//、//対象を相手の領域へ移動させる//、//強く迫る、勢いよく押し寄せる//、/精神を集中する/、/球を打つ練習を十分にする/、および慣用句的な表現としての現れ方である。この中で、//叩いて内部に入れる//、//対象を相手の領域へ移動させる//、//強く迫る、勢いよく押し寄せる//の三つのグループは、さらに細かく分類することが可能である。

これらのグループ間には、共通する要素が見られるものの、カテゴリカルな意味、文法的意味には違いもある。また、//強く迫る、勢いよく押し寄せる//、/精神を集中する/、/球を打つ練習を十分に行う/といった意味においては、(5.1.)～(5.2.)に比べ、組み合わさる要素の変化が観察される。このことから、要素の語彙的、カテゴリカルな、文法的性質や構造の変化を伴って新しい意味が現れることが示唆される。

//叩いて内部に入れる//に分類される「打ち込む」は、ガ格名詞、ニ格名詞、ヲ格名詞と組み合わさり、ニ格名詞のカテゴリカルな意味が〈物・表面〉であることが共通点である。また、これらはすべて/叩いて内部に入れる/ことを表わしている点で共通している。このグループの中で/物を固体の中に叩いて入れる/という語彙的な意味は、「打ち込む」の基本的な意味である。

//対象を相手の領域へ移動させる//に分類される「打ち込む」も、ガ格名詞、ニ格名詞、ヲ格名詞と組み合わさる。これらは、ニ格名詞のカテゴリカルな意味が〈空間〉であることにおいて共通しており、これが//叩いて内部に入れる//との相違点である。また、//叩いて内部に入れる//は構造全体として〈物〉の「付着」を表しているのに対し、//対象を相手の領域へ移動させる//という意味は〈物〉の「移動」を表している。このことから、組み合わさる要素の意味的性質と文法的性質が変わることで、同じ動詞でも異なる意味を表すようになると考えられる。

//強く迫る、勢いよく押し寄せる//に分類できる「打ち込む」は、自動詞としての現れ方を示すためヲ格名詞とは組み合わさることがなく、ガ格名詞およびニ格名詞との組み合わせが見られる。このグループに分類される/相手に打ちかかる/、/争う/という語彙的な意味におけるガ格名詞のカテゴリカルな意味が〈人〉になり、ニ格名詞が〈物・表面〉になる。一方で、/表面に向かって打つ/という語彙的な意味においては、ガ格名詞のカテゴリカルな意味が〈現象〉となり、ニ格名詞が同様に〈物・表面〉になる。「V1込む」の組み合わせにおけるガ格名詞のカテゴリカルな意味は通常〈人〉であるが、/表面に向かって打つ/においては[主体]の意味が擬人化され〈現象〉として現れることが特徴的である。この二つの意味においても、組み合わさる要素の意味的・文法的性質および構造の変化により、新たな意味の出現していることが確認できる。

/精神を集中する/という語彙的な意味においても「打ち込む」は形式上自動詞としての表れ方である。しかし、ニ格名詞のカテゴリカルな意味は〈動作〉となり、［主体］が目的達成のためにその〈動作〉を行うことを表しているため、［対象］という文法的な意味を持つと認められる。従って、この構造においては、ある程度他動性が認められ、それが前述の自動詞としての現れ方との相違点となる。

/球を打つ練習を十分にする/という語彙的な意味において、「打ち込む」は他動詞として現れるが、この場合、ニ格名詞と組み合わさらない。ニ格名詞と組み合わさらなくなることは、構造全体が反復的な動作を表すことと関係している。この点では（5.1.）～（5.2.）に記述された他動詞としての現れ方とは異なる。また、この用法はスポーツ分野に限られ、ヲ格名詞の範囲が限定されるという点で、(5.2.1.)との共通点が見られる。

「打ち込む」は、特殊な要素である/楔/とのみ組み合わさる場合、慣用句的な表現として捉える。この意味において、「楔を打ち込む」という表現は形式的には二つの単語から構成されているが、要素それぞれの語彙的な意味が生きているわけではなく、組み合わせ全体として、/敵陣の中に攻め込んで、その勢力を二分する/、/親しい間柄に邪魔を入れる/という語彙的な意味を表わしている。この点においては（5.1.）～（5.5.）に記述された他の意味に比べ特殊であり、独自の構造を有している。

参考文献

早津恵美子（2009）「語彙と文法の関わり―カテゴリカルな意味―」『政大日本研究』第６巻 1-70　国立政治大学日本語文学系

[Hayatsu, E. (2009). Goi to bunpō no kakawari- kategorikaruna imi. *Seidai nihon kenkyū, 6*, 1-70]

早津恵美子（2015）「カテゴリカルな意味（上）―その性質と語彙指導・文法指導―」『東京外国語大学論集』91、1-33東京外国語大学

[Hayatsu, E. (2015). Kategorikaruna imi (jō)- sono seishitsu to goi shidō, bunpō shidō. *Tokyō gaikokugo daigaku ronbunshū, 91*, 1–33]

早津恵美子（2016）「カテゴリカルな意味（下）―その性質と語彙指導・文法指導―」『東京外国語大学論集』92、1-20　東京外国語大学

[Hayatsu, E. (2016). Kategorikaruna imi (ge)- sono seishitsu to goi shidō, bunpō shidō. *Tokyō gaikokugo daigaku ronbunshū, 92*, 1–20]

早津恵美子（2017）「ヲ格名詞と動詞からなる連語についての奥田靖雄氏の2つの論文について」国際連語論学会編『鈴木泰先生古希記念論文集』124-140　日本語文法研究会

[Hayatsu, E. (2017). Wo kaku meishi to dōshi kara naru rengo ni tsuite no Okuda Yasuoshi no futatsu no ronbun ni tsuite. In Kokusai rengoron gakkai (Ed.), *Suzuki Tai sensei kokinen ronbunshū* (pp. 124–140). Tokyo: Nihon bunpō kenkyūkai]

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房

[Himeno, M. (2001). *Fukugō dōshi no kōzō to imi yōhō*. Tokyo: Hitsuji shobō]

姫野昌子(2001)「複合動詞の性質」『日本語学』第二十巻第８号　6-15東京：明治書院

[Himeno, M. (2001). Fukugō dōshi no seishitsu. *Nihongogaku, 8*, 6–15]

影山太郎（1999）『形態論と意味』東京：くろしお出版

[Kageyama, T. (1999). *Keitairon to imi*. Tokyo: Kuroshio]

松田文子（2001a）「コアを用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」『日本語教育』111号 16-25　日本語教育学会

[Matsuda, F. (2001a). Koa wo mochiita fukugō dōshi kōkō komu no ninchi imiron setsumei. *Nihongo kyōiku, 111*, 16–25]

松田文子（2001b）「複合動詞後項「～こむ」の意味」『人間文化論叢』第４巻 223-235　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

[Matsuda, F. (2001b). Fukugō dōshi kōkō komu no imi. *Ningen bunka ronsō, 4*, 223–235]

松本曜（2009）「複合動詞「～込む」「～走る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』由本陽子・岸本秀樹編　175-194　東京：くろしお出版

[Matsumoto, Y. (2009). Fukugō dōshi komu, hashiru, dasu to goiteki fukugō dōshi no taipu. In Y. Yumoto (Ed.), *Goi no imi to bunpō* (pp. 175–194). Tokyo: Kuroshio]

宮島達夫(1996)「カテゴリー的多義性」、鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』29-52　東京：ひつじ書房

[Miyajima, T. (1996). Kategoriteki tagisei. In T. Suzuki (Ed.), *Nihongo bunpō no shomondai* (pp. 29–52). Tokyo: Hitsuji shobō]

宮島達夫（2005）「連語論の位置づけ」『国文学 解釈と鑑賞』70-7、6-33　至文堂
[Miyajima, T. (2005). Rengoron no ichiduke. *Kokubungaku kaishaku to kanshō, 70*(7), 6–33]
三代川隆也（2015）「《関係表現》を表す連語—《物へのはたらきかけ》を表す連語からの意味の抽象化—」『日本研究教育年報』19（2014　年度版）59-76 東京外国語大学日本課程
[Miyokawa, T. (2015). Kankei hyōgen wo arawasu rengo- mono he no hatarakikake wo arawasu rengo kara no imi no chūshōka. *Nihongo kyōiku nenpō, 19*, 59–76]
奥田靖雄(1960)「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論』言語学研究会編 1983、151-279に所収　東京:むぎ書房
[Okuda, Y. (1960 [1983]). Wo kaku no katachi wo toru meishi to dōshi to no kumiawase. In. S. Suzuki (Ed.), *Nihongo bunpō rengoron* (pp. 151–279). Tokyo: Mugi shobō]
奥田靖雄（1962）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」」『日本語文法・連語論』言語学研究会編　1983、281-323 に所収　東京:むぎ書房
[Okuda, Y. (1962 [1983]). Ni kaku no meishi to dōshi to no kumiawase. In S. Suzuki (Ed.), *Nihongo bunpō rengoron* (pp. 28–323). Tokyo: Mugi shobō]
奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』８号 3-20
[Okuda, Y. (1967). Goitekina imi no arikata. *Kyōiku kokugo, 8*, 3-20]
奥田靖雄(1968-1972)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28『日本語文法・連語論』言語学研究会編 1983むぎ書房21-149に再録　東京:むぎ書房
[Okuda, Y. (1968-72 [1983]). Wo kaku no meishi to dōshi to no kumiawase. In S. Suzuki (Ed.), *Nihongo bunpō rengoron* (pp. 21–149). Tokyo: Mugi shobō]
奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』　東京:むぎ書房
[Okuda, Y. (1984). *Kotoba no kenkyū- josetsu*. Tokyo: Mugi shobō]
杉本孝司（1998）『意味論1形式意味論』東京：くろしお出版
[Sugimoto, T. (1998). *Imiron 1- Keishiki imiron*. Tokyo: Kuroshio]
鈴木重幸・鈴木康之（1983）「編集にあたって」言語学研究会編 1983『日本語文法・連語　（資料集）』3-19　東京:むぎ書房
[Suzuki, S., Suzuki, Y. (1983). Henshū ni atatte. In S. Suzuki (Ed.), *Nihongo bunpō rengoron* (pp. 3–19). Tokyo: Mugi shobō]

Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination and Reason*, Chicago: University of Chicago Press.

参考辞書

『大辞林』(1990) 三省堂
[Daijirin (1990). Tokyo: Sanseidō]
『大辞泉』(1995) 小学館
[Daijisen (1995). Tokyo: Shōgakukan]

実例出典
『新潮文庫の100冊』CD-ROM. 青空文庫 Aozora Bunkoにて参考
[Shinchō bunko no 100 satsu] CD-Rom. 青空文庫 Aozora Bunko]
有島武郎(1940)『生まれ出づる悩み』東京:岩波文庫
[Arishima, T. (1940). *Umareiduru nayami*. Tokyo: Iwanami bunko]
梶井基次郎(1926)『ある心の風景』東京:青空
[Kajii, M. (1926). *Aru kokoro no fūkei*. Tokyo: Aozora]
三浦哲郎(1964)『団欒』東京:新潮社
[Miura, T. (1964). Danran. Tokyo: Shinchōsha]
村上春樹(1985)『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』東京:新潮社
[Murakami, H. (1985). *Sekai no owari to hādoboirudo wandārando*. Tokyo: Shinchōsha]
村上春樹(1992)『国境の南、太陽の西』東京:講談社
[Murakami, H. (1992). *Kokkyō no minami, taiyō no nishi.* Tokyo : Kōdansha]
沢木耕太郎(1981)『一瞬の夏』東京:新潮社
[Sawaki, K. (1981). *Isshun no natsu.* Tokyo: Shinchōsha]
司馬遼太郎(1965)『国盗り物語』東京:新潮社
[Shiba, R. (1965). *Kunitori monogatari.* Tokyo: Shinchōsha]
高野悦子(1971)『二十歳の原点』東京:新潮社
[Takano, E. (1971). *Nijussai no genten.* Tokyo: Shinchōsha]
谷崎潤一郎(1924)『痴人の愛』東京:改造社
[Tanizaki, J. (1925). *Chijin no ai.* Tokyo: Kaizōsha]
筒井康隆(1977)『エディプスの恋人』東京:新潮社
[Tsutsui, Y. (1977). *Edipusu no koibito.* Tokyo: Shinchōsha]
山本周五郎(1963)『さぶ』東京:新潮社
[Yamamoto, S. (1963). *Sabu.* Tokyo: Shinchōsha]
吉本昭(1966)『戦艦武蔵』東京:新潮社
[Yoshimoto, A. (1966). *Senkan musashi*. Tokyo: Shinchōsha]

Sanja M. Joka

Summary

THE POLYSEMOUS FEATURES OF THE VERB *UCHIKOMU*

This research examines compound verbs of the form V1-*komu* as unified semantic units and analyzes their polysemous features across a range of morphological characteristics, focusing on the verb *uchikomu*, known for its complex polysemy. The analysis centers on the relationship between the verb and other elements within the sentence, taking into account their lexical and grammatical meanings, as well as categorical meaning, which serves as an intermediary between the two. The study draws on dictionary

descriptions and examples from literary works. As a result, a general categorization of the polysemous features of *uchikomu* and the conditions under which specific meanings emerge has been formulated. The findings reveal that the polysemy of *uchikomu* can be broadly categorized into six primary types: 'strike and insert into,' 'strike into an opponent's territory,' 'advance or rush in forcefully,' 'devote oneself,' 'practice hitting (a ball) thoroughly,' and 'invade an enemy's territory and split their forces'. The first three semantic categories exhibit further subordinate meanings. This analysis demonstrates the process by which new meanings arise through shifts in categorical and grammatical properties and structural transformations. Consequently, this paper underscores the importance of incorporating lexical, grammatical and categorical meanings, as well as the relationships between sentence elements, into linguistic analysis.

Key words:

lexical meaning, grammatical meaning, categorical meaning, polysemy, Japanese, compound verbs, *uchikomu*, semantic classification